



「油菜ちゃんによる復興・自立への道」

相馬農業高等学校 食品科学科 3年 わしお さき 鷲尾 早希

2011.3.11 私たちの住む南相馬市は、東日本大震災による津波と福島第一原発の爆発により、甚大な放射能汚染の被害を受けました。しかし、私たちは、その年の秋から農地再生の手段として、稲作に代わる作物「菜の花」の栽培を始めました。菜の花から採取できる菜種油からは、放射性セシウムが全く検出されないことに着目して、農地再生協議会の方々と協力して菜種油「油菜ちゃん」を開発し、発売しました。



当初 4ha 程であった菜の花畑も、現在では約 48ha まで増え、稲作に代わる農家の収入の一部となっています。さらに、私たちは、この菜種油の 6 次化商品の開発に取り組んでおり、まずは、マヨネーズの試作を行いました。県内産の鶏卵・食酢に若干の香辛料を加えた、新しいマヨネーズの配合割合を何度も試して、最終的には、油菜ちゃんで作ったマヨネーズに、からしで若干の風味を加えた「油菜ちゃんマヨ」を開発し、商品化することに成功しました。この 2 つの商品は、道の駅や高速道路の SA など実際に販売されており、売り上げも年々伸びています。



＜開発が進む油菜ちゃんドレッシング＞

さらに今年は、「油菜ちゃんドレッシング」の開発にも取り組んでおり、商品化のめどがたつまでの製品になりました。現在は、委託製造をしてくれる企業を探しているところです。

支援されることは、もう終わりです。これからは、私たち若い世代が中心となって、南相馬市は自立をしていかなければならない時期にきていると強く思っています。

〒460-0012 名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST プラザ鶴舞 5 階 B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京 UFJ 銀行 高畑支店(店番号 297)

口座 番号：普通 1682863

口座 名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便 振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813 (月・水・金 10:00 ～ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

南相馬便り

(神谷 俊尚)



★42 圃場から採取した菜種(部位分けし 210 検体)の放射能測定は、簡易搾油機の点検整備のため、作業が遅れていましたが、8 月末には測定が終了し、結果を纏めて、9/17 の農地再生協議会定例会で報告しました。全体的に見ると、搾った「菜種油」への放射能移行はありませんが、今年度から空間線量がいまだ比較的高いエリアの耕作地が増大したため、自然減衰や農地除染で、平均的に汚染が減衰傾向にある中、土壌・茎・根の部位平均値は少し高めでした。

現在、とどけ鳥事務所での懸案事項は、検体依頼数の減少です。短期的要因としては、夏の猛暑、その後の長雨等の理由が挙げられますが、「もう安全で大丈夫だ」「心配しなくて良い」感の蔓延が、大きく影響していると考えています。確かに、家庭菜園等の作物の汚染減少傾向はみられますが、山菜・きのこ類は依然として高く、食べられる状態ではありません。「生活圏の解除＝食の安全」と一体的にとらえられ、基本的な防御への心構えが薄れつつあることが、大いに危惧されます。「測定しつつ食する習慣」の持続の必要性を訴え続ける努力が、より一層求められます。

★9 月 10 日は晴天に恵まれ(むしろ暑い中)、約 110 名の参加者を得て、1ha の畑に菜種が播種されました。2 日前までの長雨の為、急遽「種まき会場の変更」を余儀なくされ、当日は現地集合の混乱を心配しましたが、幸い迷う人もなく開催できました。今年は新たに、滋賀県八日市南高校からも 11 名の参加があり、20 数名参加の相馬農業高生との、新たな交流のきっかけにもなりました。今年は圃場がさらに拡大するため、この「種まき会」をスタートとして、播種の前倒し、作業の加速化を目指しましたが、残念ながら、その後の連続台風や秋雨前線の影響で、播種作業は捗らず、「イライラ」状況が続く最近です(9/23 現在)。今年の播種面積は、再生協議会と協力者を含めて、60ha を超える見込みです。

毎年春に、全国の「菜の花栽培」団体が集まり、情報交換や栽培技術の発表を行う大会が開催されています。来年(2017 年 4 月 22～23 日)は、「第 17 回全国菜の花サミット in 南相馬」が南相馬市民会館(ゆめはっと)で開催されることになりました。現在の準備会を、10 月には実行委員会へと移行し、本格的な準備に入る予定です。地震・津波・原発被害を受けた農地の現状と、農業の復興へ向けた取組みを、全国に発信する有効な場として行きたいと考えています。

★小高の避難解除から、まもなく 3 ヶ月になります。帰還人口は増えていませんが、寿司屋・魚屋・時計屋や、年末にはコンビニ 2 店舗の開店で、徐々にではありますが日常生活が戻っている感があります。小高商高と小高工高は、2018 年 4 月に合併し、「小高産業技術高」として開校します。両高の 1・2 年生が集まって、小高区の魅力を発信するアニメ制作にも取り組んでいます(年内に完成予定)。小中学校、新高校の 4 月開校により、小高区内にどれだけの家族が帰還されるのかは未知数ですが、今生活している方々の期待は、大きく膨らんでいます。

12 月 10 日には、JR 常磐線「相馬～浜吉田間」が開通し、5 年 9 ヶ月を経過してようやく、「南相馬～仙台間」が直接結ばれることになります。津波被害が甚大だった「新知町～山元町間」は全線高架になり、以前より山ざわ寄りを走ります。

インフラの整備・除染を行い、帰還困難区域の 5 年以内の帰還政策を進める政府と、それを受け入れる市町村行政は、「放射線防護政策の放置」「甲状腺検査体制の後退」「住宅借上げ制度の打ち切り」「補償の終了」等々、次から次へと被災住民に課題を押し付け、原発被害はなかったものとして、オリンピックへと突き進んでいます。

★しかし私たちは、この地域がいまだ放射能に汚染されている事を決して忘れません。

第 12 期放射能測定を実施します。10 月 15～16、22～23 日は、南相馬市と浪江町、11 月 12 日は富岡町の予定です。皆様のご参加をお待ちしております。

<今年も「クリスマスカード・キャンペーン」が始まりました!!>

…あなたも、ウクライナと福島の子ども達をつなぐ「架け橋」になってください…

(神野 英樹)

私たち「チェルノブイリ救援・中部」は、1990年に発足してから今日までの25年間、「ハート TO ハート」キャンペーンの一環として、毎年欠かさず、被災地の子ども達にクリスマスカードを贈り続けています。

東日本大震災以降は、ウクライナの子ども達から福島の子ども達にも、たくさんのカードが贈られてくるようになりました。

チェルノブイリ原発事故から30年、福島原発事故から5年が経ち、「ウクライナと日本の母親をつなぐ交流 (P8 参照)」や、「チェルノブイリと福島の消防士たちをつなぐ交流 (P3 下参照)」など、新しい「架け橋」も生まれようとしています。

是非、あなたも、ウクライナと福島の子ども達をつなぐ、「架け橋」になってください(詳しくは、同封のチラシを参照してください)。

なお、10月22日(土)(10時～18時)には、名古屋市栄の「オアシス 21 (銀河の広場)」で開催される、「ワールド・コラボ・フェスタ 2016」に参加して、カード作りを行いますので、是非、足を運んでください。



<フクシマの消防士のヘルメットをウクライナの博物館へ!>

(小林 岳紀)

今年4月の「スタディ・ツアー」でウクライナを訪問し、諸団体の方々に話をうかがった時に、フクシマの放射能被害とは異なる状況がある事に気付きました。チェルノブイリ原発事故の際には、火災の発生と爆発による放射能汚染の拡散がひどく、消火作業を行わなければより重篤な被害がもたらされるとの危惧があり、消防士は第一線に出て消火活動に従事する事となりました。結果的に、高線量エリアの作業を余儀なくされ、重度の被曝のため、発病したり命を落とした方が多くおられたそうです。

その様な風景を目の当たりにした方々の思いには、特別なものがあつた事は想像に難くなく、『**献身的に消火活動に立ち向かった消防士たちは、国を救った英雄である**』と言う思いを、誰もが強く抱いていると思います。

この度、ウクライナのジトミル州コロステン市の消防署に「消防博物館」が開設され、『世界各国の消防士のヘルメットを蒐集しているが、同志である日本ーフクシマのヘルメットの展示がないのは片手落ちである。ヘルメットを寄贈していただけないか。』とのお話がありました。

この話を、福島県南相馬市役所の田林副市長にしたところ、便宜を図れるのではないかとので、現地ウクライナの消防署と福島県相馬地方広域消防との仲介をしていただき、9月12日に無事、南相馬市役所で消防士のヘルメットをお預かりする事ができました。



<南相馬市田林副市長(右)から贈呈を受ける小林さん>

このヘルメットは、「チェルノブイリ救援・中部」の代表団が12月に現地を訪問する際に、お届けする予定です。我が国では、幸いにも原発事故に伴う大火災は発生しておりませんが、津波による被災者の救助や遺体捜索など、福島の消防士の方々は精神的にも過酷な業務に携わってきました。これを機に、ウクライナと我が国の消防士の間で、連帯を図ることができるのではないのでしょうか。

最後となりましたが、この取り組みに対してご協力いただいた、南相馬市桜井市長・田林副市長、相馬地方広域消防本部長、並びに、関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

<12月のウクライナ訪問団 スケジュール(案) 紹介>

(神野 英樹)

12月10日(土)	「ホステージ基金」との打ち合わせ、「障害者支援基金」との面会
11日(日)	チェルノブイリ原発視察
12日(月)	ナロジチ地区病院、おひさま幼稚園、オヴルチ地区病院、コロステン消防署 訪問
13日(火)	「リクヴィダートル」「チェルノブイリ」の消防士連基金」との面会、グズメンコ氏(ウズラ業者)訪問
14日(水)	「事故処理作業者の日」のイベント出席、「ホステージ基金」との打ち合わせ
15日(木)	「チェルノブイリ博物館」視察

12月(8日～17日)の「代表団派遣」スケジュールが、固まってきました。

今回は、私 神野(英)と、伊那「いのちがだいじ連絡会」の小野寺 璽子さん、福島県南相馬市(小高区)の小林 岳紀さんの3名による訪問となります。私は、実に10年ぶり(確か6回目?)の訪ウとなりますので、懐かしい現地の皆さんと会えることを、今から楽しみにしています。

毎回、代表団のお仕事は盛りだくさんとなるのですが、今回も御多分に洩れず、「ホステージ基金との打ち合わせ」をはじめとして、『「事故処理作業者の日」のイベント出席』『「事故処理作業3団体との面会(医薬品贈呈)』『「おひさま幼稚園などの訪問(クリスマスカード贈呈)』『「コロステン消防署訪問(ヘルメット贈呈)』など、大切な任務を両手に抱えての出発となります。

今回、個人的には、戦時下であるウクライナの状況をこの目で確かめ、そもそも「なぜ、戦争が起きてしまったのか?」「平和を取り戻す方策は?」など、本音の話し合いをしてきたいと思っています。



ウクライナ訪問に当って (長野県伊那市 酪農家 小野寺 璽子)

チェルノブイリ原発事故の時、私は伊那に移住して4年、4人の子どもを抱えて、酪農で自立すべく必死に働いている時でした。末っ子が入院していて、原発事故のことを知ったのはだいぶ後のこと、新聞の片隅に、「ドイツで母親達が、子どものためにヨード剤を求めて薬屋に並んでいる」という記事を見た時でした。この記事は、ずっと私の中であって、原発反対運動に関るようになりました。

河田さんに講師になっていただいて勉強会を開き、通信を発行し、チェルノブイリ救援のバザーや被災地の子ども達の絵画展をしたり、チェル救と協力して現地に粉ミルクを届けるなど、伊那の「いのちがだいじ連絡会」の活動の中で、チェルノブイリと関わってきました。伊那の活動がかなりの部分でチェル救と重なってきた時、子育てと仕事の関係で伊那を離れることができない私は、原さんと小牧さんにお任せして活動から離れてしまいました。今は、漁業支援で始めた「芦浜の魚」を購入し続けること位しかしていません。

「身近にあるものを利用してエネルギー自給を」と作ったバイオガスピラントは、私達の家族の中心にあって活用されています。これが、ウクライナや福島を除染に一役買うことになろうとは思いませんでしたが、思いを持って続けていれば、いろいろな形で役に立つということに、不思議な何かを感じます。

今回、「ウクライナに行かないか?」という話があった時、昔からのいろいろなことが思い出され、この与えられたチャンスに、「お役に立てるならば、私も体力があるうちに行きたい」と、参加させていただくことにしました。他にも適任の方がいらっしゃるのに…とは思いますが、この機会に、チェル救のウクライナでの活動をしっかり見させていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

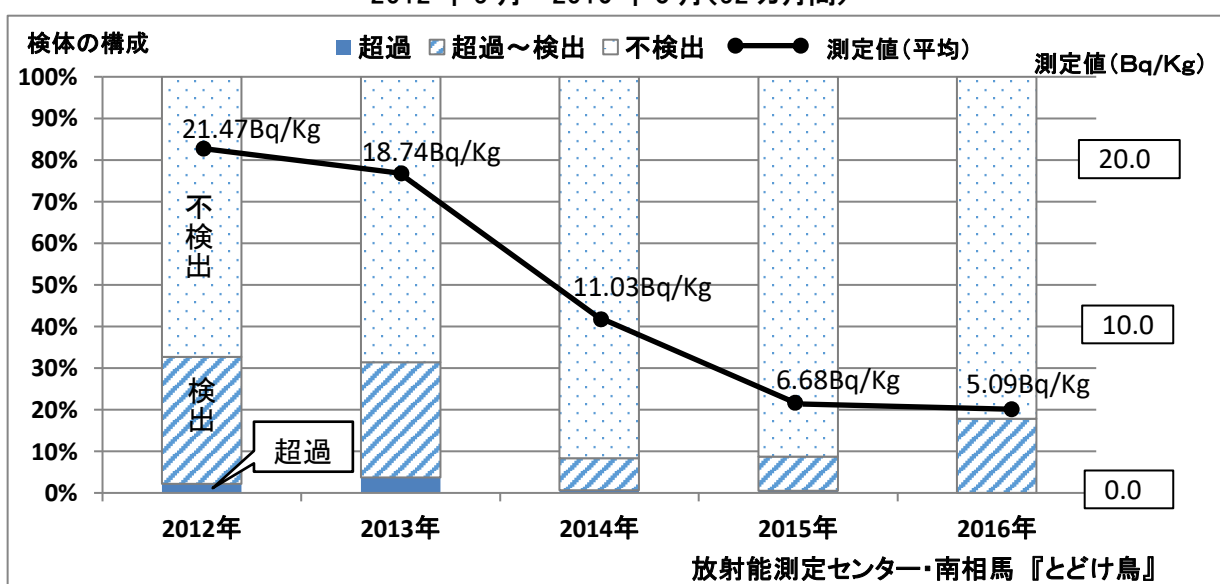
放射能線量測定の結果考察(野菜類:2012～2016) (小林 岳紀)

東日本大震災から1年3ヵ月後の2012年6月に、放射能測定センター・南相馬『とどけ鳥』を開所して、4年以上が経過しました。その間、田畑や庭などの『土壌類』、野菜や果物・加工食品などの『食品類』、井戸水や水道水・河川水などの『水類』・・・、市民の皆様が持ち込んでくださる検体について測定を実施してきました。総件数は約13,000件にのぼり、各々の分類別で見ると、概ね1/3ずつの件数割合となっています。

この度、2012年から2016年8月までの測定実施結果の内、『野菜類』について集計作業を行いましたので、ご報告したいと思います。データの正確性などの観点から、件数的に大部分を占める「南相馬市産」に限定し、「茹で処理」や「灰汁抜き」「塩漬け」などの加工処理をした検体は除外しました(対象は約1,300検体となりました)。測定結果は、下記のグラフを参照してください。

福島県南相馬市における放射線量の推移(野菜類)

2012年5月～2016年8月(52ヵ月間)



折れ線グラフは、『野菜類』全体の測定値(平均)の推移です。棒グラフの「塗りつぶし」は、「国の食品基準値(100Bq/Kg)を超過する検体数」、「斜線」は、「検出下限値を超過して放射性セシウムが検出された検体数」、「点々」は、「不検出」です。

【検体収集と測定方法について】

このグラフは、市民の皆様から持ち込まれた検体についての測定結果の集計であり、年毎の個々の検体は、必ずしも同一の条件下にはありません。また、持ち込まれる検体が、量的に満足出来る状況ではないものも多少ありましたが、多数の検体があった事から、比較検討が可能なレベルであると思われます。

【測定集計結果について】

- ①野菜類の測定値(平均値)は、2012年から2016年の間で順次低減している状況が伺われます。
- ②国の食品基準の100Bq/Kgを超過する検体は、2012～2013年の当初に多く見られましたが、以降の年では殆ど見られない状況となっています。
- ③検出状態(斜線)の検体についても、同様に2012～2013年に多く見られ、2014～2015年では漸減していますが、2016年分は、逆に若干上昇しています。これは、警戒区域の解除や区域見直し、並びに、帰還者の増加などの要因で、採取可能な範囲の拡大や栽培再開の取組みが増大した事が影響していると考えられます。

長野県・宮田村

「放射性廃棄物・最終処分場」計画浮上！ 放射性廃棄物の地方への拡散・無責任処分は犯罪



長野県伊那市の南隣、上伊那郡宮田村に「放射性廃棄物の最終処分場」建設計画が浮上している。自然環境の豊かな山村に突然降って湧いた計画に、予定地である大久保地区の住民は困惑している。事業者は南箕輪村の「ハクトートータルサービス㈱」。2015年5月に、宮田村大久保地区役員に、計画の意向説明が行われた。

予定される廃棄物は、廃プラ類・ガラスくず・廃家電などの**一般廃棄物**と、燃え殻・污泥・ゴム・金属くずなどの**産業廃棄物**。問題は、これらに加え、**国の定める埋め立て基準(8,000 Bq/kg)以下の放射性物質含有の焼却灰・飛灰・污泥が、一般廃棄物とされ持ち込まれることである。**

「宮田の環境を守る会」結成

この計画に、村議会と大久保地区住民は反対し、村民・地区住民を中心に「宮田の環境を守る会」を結成し、認可権を持つ長野県に対して、反対署名運動などを行っている。署名は現在 10 万名分に近づいている。

宮田村は長野県南部に位置し、東に南アルプス、西に中アルプスを望む田園地帯である。建設予定地周辺には、有機栽培のリンゴ園や田んぼが広がり、近くの河原は、自然を求める山村留学の子ども達の水遊びやバーベキュー場となっている。コンクリートで固化されるとはいうものの、コンクリートの寿命は条件にもよるが 50 年～60 年であり、コンクリートの劣化や破壊・亀裂により、放射性物質の漏れだしによる環境汚染が心配されている。また下流には、農業用水や飲料水の取り入れ口があり、天竜川流域 50～60 万人に影響が及ぶ可能性がある。

環境省の動き

最終処分場に持ち込まれる予定の「放射能で汚染された廃棄物」は、福島原発事故によって生じた「8,000 Bq/kg」以下の汚染物である。事故後の 2011 年 8 月、国会で「放射性物質汚染対処特措法」が可決され、事故以前の基準「100 Bq/kg」を大幅に超える「8,000 Bq/kg」以下の汚染物が管理型最終処分場で埋め立て可能になった。

今年 4 月 28 日、環境省は「8,000 Bq/kg」以下の放射性廃棄物を、一般ごみ処理場で処分できるとし、更に 6 月 30 日には、「8,000 Bq/kg」以下の放射性廃棄物を、公共工事などの盛り土や路盤材として利用する基本方針を決定した。福島原発事故で飛散した指定廃棄物（8,000 Bq/kg 以上）は、2015 年 12 月末時点で 12 都県合計 17 万トンに上る。指定廃棄物について、政府は 2015 年 3 月までに周辺 12 都県内にそれぞれ処分場を確保し、指定廃棄物を順次搬入する工程を示したが、候補地各地の住民の反対によって、建設のめどは立っていない。また「最終処分場」の名称を「長期管理施設」に変更するなど、姑息な手を打っている。**溜まる一方の放射性廃棄物の処分に困った環境省は、本来の環境を守る役割を捨て、法令を次々改悪して全国に放射性廃棄物を分散し、国の管理責任を放棄して、産廃業者や地方自治体にその責任を負わせようとしている。**

これが国の姿勢である。2020 年のオリンピック開催に合わせて、「福島原発の事故処理は終わった」というポーズを作るために、全国に放射性廃棄物を分散する国の姿勢は、批判されるべきである。また、同じ長野県南部の大鹿村では、南アルプスをトンネルで貫くリニア新幹線工事が始まろうとしている。この狭い日本にリニアはいらない。リニアを動かすには、原発再稼働が必須となる。リニアを日本で走らせる目的は、「リニアを外国に売るための実証」目的に他ならない。**オリンピック・リニア・放射性廃棄物処分場は、悪魔の輪でつながっている。**（南箕輪村 原 富男）

その夢と現実

この連載ですでに何度も述べた事だが、改めて「もんじゅ」の問題点を述べたい。「政府が 9 月 21 日 もんじゅの廃炉を含めて見直し」との報道が、マスコミをにぎわしている。政府の意向は、もんじゅを廃炉にしても、高速増殖炉開発と核燃料サイクル事業は続けたいとのことだが、それは全く矛盾に満ちた主張であり、真意は他にある。もんじゅを廃炉にしても核燃サイクル維持…の理由はただ一つ、「プルトニウム濃縮技術保持による核兵器保有の欲望」である。

高速増殖炉の夢

天然ウランは燃える U235 を 0.7%しか含まず、70 年もすれば無くなる。そのため、燃えない天然ウランU238 を燃えるプルトニウム Pu239 にすれば、原発の燃料は 100 倍に増える…というのが原子力開発の夢だった。誰がつけたか知らないが、「高速増殖炉」(以下、高速炉)とはまさにその夢の表現である。燃えたプルトニウムより多くのプルトニウムを高速中性子で増やす…という主張だが、それは事実だったのか？ 否である。もんじゅが、使った以上のプルトニウムを寿命前に増やすことは出来ない。かつて、動力炉核燃料開発事業団(動燃)の理事長は NHK の公開討論会で、「もんじゅが使った以上のプルトニウムを増やすには 90 年かかる」と明言した。この点を株主総会で質問された中部電力の浜岡原発所長は、「確かにそうだが、もんじゅを 90 基作れば 1 基分の燃料ができる」と答弁して失笑をかった。専門家なら、この根拠は誰でも知っている筈である。

世界の高速炉のプルトニウム倍增時間

再処理・加工中の燃料中のプルトニウムの量が、炉心のプルトニウムの 2 倍になるのに要する時間を、倍增時間(tD)という。筆者が、公開されたデータから世界の高速炉の倍增時間を計算したものを表に上げる。いずれも設計値である。

増殖炉	倍增時間
もんじゅ (日本)	95年
常陽 (日本)	300年
カルカー (独)	95年
スーパーフェニックス (仏)	76年
BN 600 (ロシア)	130年

実際に稼働した結果のデータでは、スーパーフェニックス

は無限時間かかり、カルカーはプルトニウムが減少した。即ち、稼働中にプルトニウムを倍增出来る高速炉は、現在世界に1つもない。これが、世界が高速炉を諦めた最大の理由である。

プルトニウム増殖は可能か

理論的には、倍增時間短縮は可能である。炉心のプルトニウム濃度を上げ、発生する中性子を増やせばよい。しかし、これには大きなリスクが伴う。現在、通常の軽水炉原発の炉心出力密度は「50Kw(キロワット)/リットル」だが、もんじゅのそれは「500Kw/リットル」…10 倍である。

1リットルの容器に 1Kw の電熱器を 500 個詰め込んだ状態である。倍增時間短縮は、これを更に大きくする。これが何を意味するかは明らかである。事故などで一瞬でも冷却機能が失われれば即、核暴走か炉心溶融が起こる。倍增時間短縮を目指せば、高速炉は限りなく核爆弾に近づくのである。高速炉開発は夢のまま終わるべきである。
(2016 年 9 月 26 日 河田)

オーディオ・ドキュメント「チェルノブイリからフクシマへ 母親たちの手紙」

(NHK ラジオ第一 2016 年 9 月 10 日 9:05～9:55)

(戸村 京子)

私たちは、2016 年 4 月が「チェルノブイリ事故から 30 年・福島事故から 5 年」という節目になるため、2015 年 11 月から、「チェルノブイリ／フクシマ講座」として「原発事故被災者と心をつなぐ交流会」を開催し、チェルノブイリの母親たちの手紙集『チェルノブイリからの手紙…10 年目のチェルノブイリ…』を読む会を、4 回続けてきました。ここからラジオ番組が制作されました。

フクシマから愛知県に避難した母親たちや、その支援者も参加して、ゆっくりとした時間の中で手紙集を読み、チェルノブイリの母親たちが日本へ宛てて綴った手紙の感想や、避難者の複雑な思いを語り合いました。この講座に、チェルノブイリと日本の母親たちを繋いできた文通に深く関心を抱いた、NHK ディレクターの滝川さんも参加されていました。我が子への放射能の影響を恐れるウクライナの母親たちの苦しい生活に、共感する避難者の母親たち。チェルノブイリの 30 年を経て、フクシマの被災者を励ますウクライナからの新たな手紙。この「チェルノブイリの母親たちと講座に集う日本の母親たちの思い」を何とか広く伝えたいと、滝川ディレクターからラジオ番組の制作が提案されました。

番組は、「母として、人間として、どのような未来を創るのか？」という疑問と問いかけを縦軸に、国を超えたチェルノブイリとフクシマの母親たちの、悩み苦しみながらの日常、共感と未来への希望を横軸にして、構成されていたと思います。チェルノブイリからの手紙数編の朗読から始まり、チェル救への文通のいきさつの取材もありました。被災者へのインタビューでは、福島からの避難家族の理不尽な避難生活とチェルノブイリの母親たちへの共感、「強制疎開から戻りたくても戻れる状況ではない」と訴える南相馬市からの伊藤さん夫妻のやりきれない気持ちが伝わってきました。またエカテリーナ・ボウクンさんと長く文通を続けていた岡山の女性、さらにウクライナのボウクンさんへ電話での直接インタビューもありました。

講座を主催している私達も、アナウンサーによって朗読される「チェルノブイリの母親たちの手紙」にあらためて胸を打たれ、福島の現状を憂い、これからも被災者に寄り添っていくことを心で誓いました。これからも、「チェルノブイリ／フクシマ講座」は継続していきます(協力：認定 NPO 名古屋 NGO センター)。

【録音 CD あります】

9/10 の番組を聞き逃した方・ご関心のある方は、録音 CD があります。お問合せは事務所まで。

【次回のチェルノブイリ／フクシマ講座】

日時：10 月 15 日（土）10:30～12:30

場所：名古屋 NGO センター事務所（名古屋市中区新栄町 2-3 YWCA ビル 7F、地下鉄栄駅⑥出口から徒歩 3 分）

参加費：300 円（避難者無料）

【手紙・手記の募集】

被災者や支援者の方々にも、チェルノブイリとフクシマの原発事故被災者への手紙、放射能に向き合って生きなければならない現在の生活、未来への思いなど、手紙・手記を募集しています。第一次締め切り（9/30）は過ぎましたが、引き続き受け付けますので、ポレーシェの読者の方もどうぞよろしくお願ひします。ウクライナの「ホステージ基金」と相談しながら、新しい手紙集にまとめられればと考えています。

【翻訳ボランティアの募集】

手紙の翻訳ボランティア（ロシア語・ウクライナ語訳）のご協力をいただける方も募りたいと思います。メール等で事務所までお申し出くださると幸いです。



まるで映画のセットのようだ・・・「大飯・高浜原発 海上視察」 (井上めぐみ)

9月24日(土)、この日は天候に恵まれ波は穏やかでした。湾に深く入りこんでいる壮大な山々。日本海の波に打たれているたくましい岩肌を眺め、時に渦を巻く海。少し湿った海風を受け、海鳥たちの姿を眺めながら、美しい景色に息を飲む。そこに突然見えてきた巨大な建物、大飯そして高浜(原子力)発電所。きっかけは数年前。福井県に釣り船を所有する方とご縁があり、「海上から原発を見てみたいので、船に乗せていただけませんか?」と思いつきでお願いしたことが始まりです。チェルノブイリの事務所にお邪魔した時に、このお話をさせていただいたところ、即参加者(10名)を募っていただき、即決行。大飯原発～高浜原発までを巡る。当日、原発問題を中心に活動されている敦賀市会議員の今大地(こんだいち)はるみさんも同船。敦賀・小浜・高浜、それぞれの歴史、そしてこれまでの闘い、地元の方だからこそ語れる深い深いお話も、時間ギリギリまで聞かせていただきました。

原発を受け入れなかった小浜の漁師さんの言葉も印象に残ります。「大飯原発からの放水が止まり、海水の温度が戻ったおかげで、小魚が減ってイカも少なくなったんだよね、これからどうなるんだろうなあ…」と、風向きを気にしながらつぶやく。参加者の皆さんそれぞれに、色々な想いを胸いっぱい詰めながら降船。その後、市場で海の幸を堪能してお腹もいっぱい。

現地に行かないと知ることのできないことがある、知らなきゃいけないこともある。

大飯原発に近い福井県小浜市までは、名古屋から車で約2時間。走行距離約150キロ。近いと感じるか、遠いと感じるか、感じ方も人それぞれ。日帰りというハードスケジュールでしたが、参加者の皆さんをはじめたくさんの方にお力を貸していただき実現できたことを感謝いたします。



<大飯原子力発電所(左)と 高浜原子力発電所(右)>

日本初！…老朽化原発の安全性を問う…

「高浜原発 40 年廃炉名古屋訴訟」が始まりました！

(吉名 紀子)

老朽化原発とは運転開始から 40 年以上となる原発のことです。福島原発事故後、原発は原則 40 年で廃炉とすることが法律で決まりました。これは、福島原発事故の教訓により定まったものです。しかし、政府と規制委員会、電力会社は易々と老朽化原発(高浜原発 1 号機と 2 号機)を 20 年延長し動かすことを決めました。原発はただでさえ危ないものだということを福島原発事故で知ったはずですが、今度は、40 年を超えた老朽化原発を動かそうとしています。

自動車や飛行機が 40 年以上安全に動くでしょうか。原発の心臓部である圧力容器は、放射能の核分裂反応で運転が長くなるほど脆く壊れやすくなっていきます。脆く壊れやすくなった圧力容器が破壊した場合、福島原発事故以上の被害となることは間違いありません。

福島では、自然豊かだった土地に放射能が降り注ぎ、それは広範囲で地中深くに沈み、人類が守り受け継いできた全てのものを一瞬にして奪い取り、これから先も長きにわたり居座り続けることになります。子ども達の甲状腺ガンも増えています。彼ら一人ひとりの人生はどうなっていくのでしょうか。これらはまだ何も解決できていません。私たちは二度と同じ過ちを繰り返すわけにはいきません。今、大人一人ひとりが子ども達や未来に生まれる人たちのために、正しい判断をするときです。国と電力会社が最も危ない老朽化原発運転を延長すると言うならば、それを私たち国民が阻止しなければなりません。国民が反対すれば阻止できます。

高浜原発老朽化原発行政訴訟の弁護団は、原告のみなさんや原発を止めたい全てのひとと共に、この訴訟に全力で取り組んでいます。

スタディツアーに参加して

(櫻井 善行)



＜追悼記念行事に参加した。多くの消防士が犠牲者になり、今なお後遺障害に悩まされている事実を知らされた。(4/26)>

昨年の春、南相馬の放射線測定に参加したとき、チェルノブイリ原発事故 30 年を「記念」したスタディツアーを企画すると聞き、迷わず参加申し込みをした。当初の気持ちはこの機を逃すと一生行く機会を失うからという好奇心からであったが、その時期が近づく不安がよぎるようになった。日本から 8000 キロも離れた土地に行き、見知らぬ人々、風土、食事、言語、制度など 10 日も過ごす事への不安だった。それでも行く数日前には開き直りの気持ちになって、当日を迎えることになった。同行者は 16 名、その三分の一は日知であったが、その他は初対面であった。

4 月 24 日午前、セントレアを飛び立ち、まずはヘルシンキで一泊したあと空路ウクライナに入った。町で出会う人々、気候、風土、建物、どれもこれも日本とは違うことを肌で感じた。25 日には空港からジトミルという小さな町の宿に向かって車で向かうが 200 キロ近い道のりを延々と向かった。到着したのは現地時間夜 9 時過ぎであった。ここからがハードなスタディの始まりであった。

「4 月 26 日」この日はチェルノブイリ原発事故から 30 年の節目の日であった。私たちは各地で行われた追悼記念行事に参加した。多くの消防士が犠牲者になり、今なお後遺障害に悩まされている事実を知らされた。

その後も、ハードなスタディツアーは続いていく。事故現場に近づくこと事故後 30 年たった現在も地区内にはホットスポットが点在、汚染した農地は放置したまま、木材の実用化のために涙ぐましい除染がおこなわれてきた。地区中央病院の施設に踏み入れて正直なところ、これがこの国の医療施設の現状を思い知らされた。事故後廃墟となったプリピャチ市を訪れ、最後にバーレシウ村で自給生活をする「サ

マジョーロ」(自主帰還者)の一人である 81 歳のイヴァン爺さんとお話が聞けたのも思い出だ。キエフに戻り、国立チェルノブイリ博物館の見学、移住者の居住地区でのナイチンゲール合唱団の出迎えなどなど、どれも記憶に残るものであった。

チェルノブイリ原発まで向う途中のことであった。ソ連邦崩壊後、ソ連邦から独立した各国ではスターリンだけでなく、レーニンの像も撤去されているのが一般的だが、圏内にはレーニンの像が無傷のまま生き延びていた。過去の 1 つの歴史事象ととらえていいかもしれないが、この原発事故が起きた 1986 年 4 月 26 日、まだソ連邦は存在していた。

この重大事故が内外に明らかにされるようになったのは事故 4 日後の 4 月 30 日であった。この時期の情報公開が、この程度であった。しかしこの事故によって、評価はいろいろあるが、ゴルバチョフの登場と「グラスノスチ」「ペレストロイカ」を促し、ソ連邦の解体を促したことはよく指摘されるどころ。観光だけなら、最後に立ち寄ったラトビア・リガは最高であった。散策途中に見つけた寿司レストラン「YAKUZA」や夕食時のレストランで 2 時間も待たされたことも、日本ではあり得ない思いであった。この国の人の忍耐力に感心と古都の美しさが強く印象に残った。この年になってすてきな体験をさせてくれたツアーの企画者・参加者の皆さんに感謝の意を表明したい。

追記 日本に戻る前日、ラトビアの古都リガでの自由行動を利用して「大人(年寄り)の冒険一人旅」をした。手元には英語表記すらない 1 枚の現地の観光地図だけだった。もちろんラトビア語は全くわからない。片言の英語での対応だ。軍資金ユーロをポケットに入れ、出かけた。お昼過ぎまで時間をかけて最初は徒歩で駅まで散策した。まずリガ大聖堂に向けて歩いたが、途中トイレに行くと入口で 30 ¢ とられた。話には聞いていたが、面食らった。駅や施設内の多くも同じであった。昼食はチップ不要のスーパーで夜食分の購入した。途中中心部の複合施設で書店で買い物をした後はリガ駅に向かって駅脇で遅めの昼食を終え、次の目標は鉄道に乗ることであった。まずは国鉄である。乗って戻って来れなかったらお笑い話である。Ogre という駅を選んだ。こちらは感熱紙のチケットで、改札口もなく、そのまま乗車する。すぐに女性の検札が来た。片言英語で話すと、どうも通じないが、行き先は通じたようである。駅に近づく 2 度も next と言いに来た。駅を降り立ち帰りの列車までしばし時間つぶしをした。の

どかな町であった。駅前にコーヒーショップがあり、片言英語で注文した。対応した若い女性が「from Japan?」と聞いてきた。日本人だとわかるのだとうれしく思った。無事リガ駅まで戻り、トラム(路面電車)に乗った。乗降システムがわからず、乗り場の横にある自動券機に開き直って、3€を投入したら、おつりと IC チップ付きの厚紙カードが出てきた。これだなあと、次の電車に乗り込んだ。港の近くまで行けた。そこから意外と近いホテルに戻ると 20 時を過ぎていた。無事、年寄りの冒険は終わった。スマホの歩行計では 2 万 3 千歩を超えていた。実は今なお、その余韻に浸っている。ゆったりとした人とモノの動きが今も忘れられない。

チェルノブイリ・スタツア報告 2016.5.26

(大阪府箕面市 北川照子)



＜ウクライナは予想をはるかに超えて、自然も生活も人も豊かで美しいところでした。宿の給湯用の薪を作ってくれているマキのおじさん。滞在中は、通称「マキノさん」と呼んでいました。(4/28)＞

チェルノブイリ原発事故があった 1986 年 4 月頃、私は、まだ 1 才にならない長男を乳母車に乗せ、よく散歩に出かけていました。報道された西の空を遠く見上げ、ただただヨーロッパの様子や日本への影響を心配していたのを覚えています。少しして『まだ間にあうのなら』という本と出会いました。事故が長期にわたり地球規模の汚染を起こすこと、そしてそんな原発が日本に 50 基もあることを知り驚きました。「まだ間に合うなら」と子育てが一段落した頃、環境活動に加わりました。しかし、福島原発の事故が起こり、心のどこかに「日本では起きないだろう」という思い込みや認識の甘さがあったことを思い知りました。

昨年「菜の花プロジェクト・箕面」の 10 周年企画に講演者として来られた藤井さんから、春にチェルノブイリを訪問されるとのお話を伺いました。一般人も行けるんだと驚くと同時に、その場で「私も一

緒に行けるなら連れてってください」とお願いしました。事故以来ずっと気になっていた現地をこの目で見たい、また、30 年たったチェルノブイリの生活状況や行政対応を見ることで、何か福島復興支援につながることもあるのではと思いました。

ウクライナは予想をはるかに超えて、自然も生活も人も豊かで美しいところでした。晴れ渡る空の色、延々と続くみどりの草原、白樺やアカマツ林、リンゴの花…。「こんな美しいところに人が住めないなんて」と、改めて原発の罪深さをしみじみと感じました。特に、交流会で、30 年たっても当時のビデオを見られず立ち去ったゾーヤさんたちの無念の涙を忘れられません。

帰国してから、河田さんらに教えて頂いたノーベル文学賞作家アレクシエービッチの『チェルノブイリの祈り～未来への物語』を読みました。原発事故で、愛する家族やふるさとや生活を奪われた人々の一言一言が、息遣いごと伝わってくる証言集でした。世界で原発をもつ国は 38 カ国になっています。この悲しみをこれ以上繰り返さないためにも、世界中の人が、この本に書かれた真実を知らなければいけないと思います。

法律も少し調べました。『チェルノブイリ法』の基本概念には「最も影響を受けやすい人々、つまり 1986 年に生まれた子ども達に対するチェルノブイリ事故による被ばく量を、どのような環境のもとでも年間 1 ミリシーベルト以下に、言い換えれば一生の被ばく量を 70 ミリシーベルト以下に抑える」とあります。また、『被災者の状況と社会的保護に関するウクライナ国法』の前文には、「チェルノブイリ激甚災害は数百万人の人々に惨禍をもたらした。…(略)…激甚災害被災者に対する実効性ある福祉システム構築のために、あらゆる財源、膨大な物資と先端科学を総動員する必要がある。…」と諷し、何度も法律改正を繰り返しています。戦争などで思い通りにいってないところもありますが、国の責任で全力で支援していこうという姿勢が法に表れています。

責任の所在も明らかにしないいうえ、どさくさまぎれに年間被ばく量の基準を 1 ミリから 20 ミリシーベルトに変えた日本、放射性物質の基準を 100 ベクレルから 8000 ベクレル/kg に変えた日本は、ウクライナ政府の真心を見習うべきだと思います。もっと被災者や現地によりそった法律や制度に変えていきたいです。

最後に、一緒に貴重な時間をすごさせて下さった皆さんに感謝いたします。秋には双葉屋旅館に泊まって、種まきや測定に参加したいです。

事務局便り

事務局では、第12期測定隊の準備がほぼ終わり、12月代表団派遣準備は半ば、カードキャンペーン準備や助成金報告書にとりかかろうという今日この頃。そんな折も折、人生の何度目かの卒業式を終え「サンデー毎日」【注：本人曰く、「毎日が土曜日！」（←明日も休み）】のナイスガイ?! が、事務所に頻繁に出没している。何を隠そう、理事の神野英樹氏である。会社をめでたく定年退職し、何の不自由もない生活を満喫するかと思えば、予想を裏切り、NPO 渉外担当として活発な動きを見せている。今年のカードキャンペーンは、締切りが11/30と早くなっている。名ばかりの秋—猛暑の折、クリスマスカードはイメージできないだろう…という頃から、盛んに「営業活動」を開始している。やる気満々！機動力抜群で、どこへでも駆けつける事は既に実証済みなので、カード作りを是非というグループがありましたら、躊躇なくご一報を！（山盛）



「正会員」「賛助会員」大・大・大募集！！

「違いが分かりにくい」と、支援者の皆さまからご意見を賜りましたので、説明いたします。

- *正会員 ⇒当法人（チェル救）の目的に賛同し積極的に活動していただける方で、入会申込書提出の後、理事会で議決を経て入会が認められる。年会費 3,000 円を納めるとともに、総会にご出席の上、議決権の行使ができる。《義務ではないが、正会員出席が半数に満たないと総会が成立しないので、権利行使できる方が望ましい》
- *賛助会員 ⇒年会費 3000 円（納めた日から 1 年間）で、チェル救の目的に賛同いただける方ならどんなでも。《もちろん、それ以外の不定期の寄付も大歓迎》

いつも、チェル救の活動にご理解いただき感謝しております。今一度、恐縮ながら（汗）ご寄付および会員登録をお願いします。なお、正会員入会のご希望は、事務局までご一報ください。（会計 上田）

編集後記



- ☆映画「ハドソン川の奇跡」を観た。これが遺作かも？と思いつつ、クリント・イーストウッドの映画にはなるべく足を運ぶ。でも毎回裏切られ（？）次の映画が待ち遠しい。（佳）
- ☆驚いた！高浜原発は視界を遮るものもなく、テトラポッドが積まれた浜辺にある。津波被害のあった東日本の海を思うと、無謀とも思える立地だ。日本海の津波は、今なお「想定外」らしい。（美）
- ☆小池都知事がリオから帰国し、「豊洲移転問題」を追う都議会が始まった。今議会の最大の焦点は、いうまでもなく「盛り土から地下空間に設計変更された真相」と、「その首謀者は誰なのか？」ということである。しかし、この移転問題には、もう一つの「隠されたシナリオ」がある。それは、「豊洲のカジノ転用計画」だ。小池都知事は、表向き「都民ファースト」という市民受けするキャッチフレーズを掲げているが、これまでの彼女の経歴を見れば、明らかに「マネーファースト」と呼ぶに相応しい。機を見て敏に、その時々政権の側近として入り込んできた。もちろん、「カジノ議連」にも名を連ねている。ここにきて、カジノ利権の「アルゼ」や「セガサミー」も、この動きを睨んで、既に名乗りを上げているという。都議会において、このシナリオが進行するには、しばらく時間を要すると思われるが、都議会の議論の推移を見守る上で、極めて重要な視点である。（J）

〒456—0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「**エーブリント**」

TEL・FAX (052) 871—9473